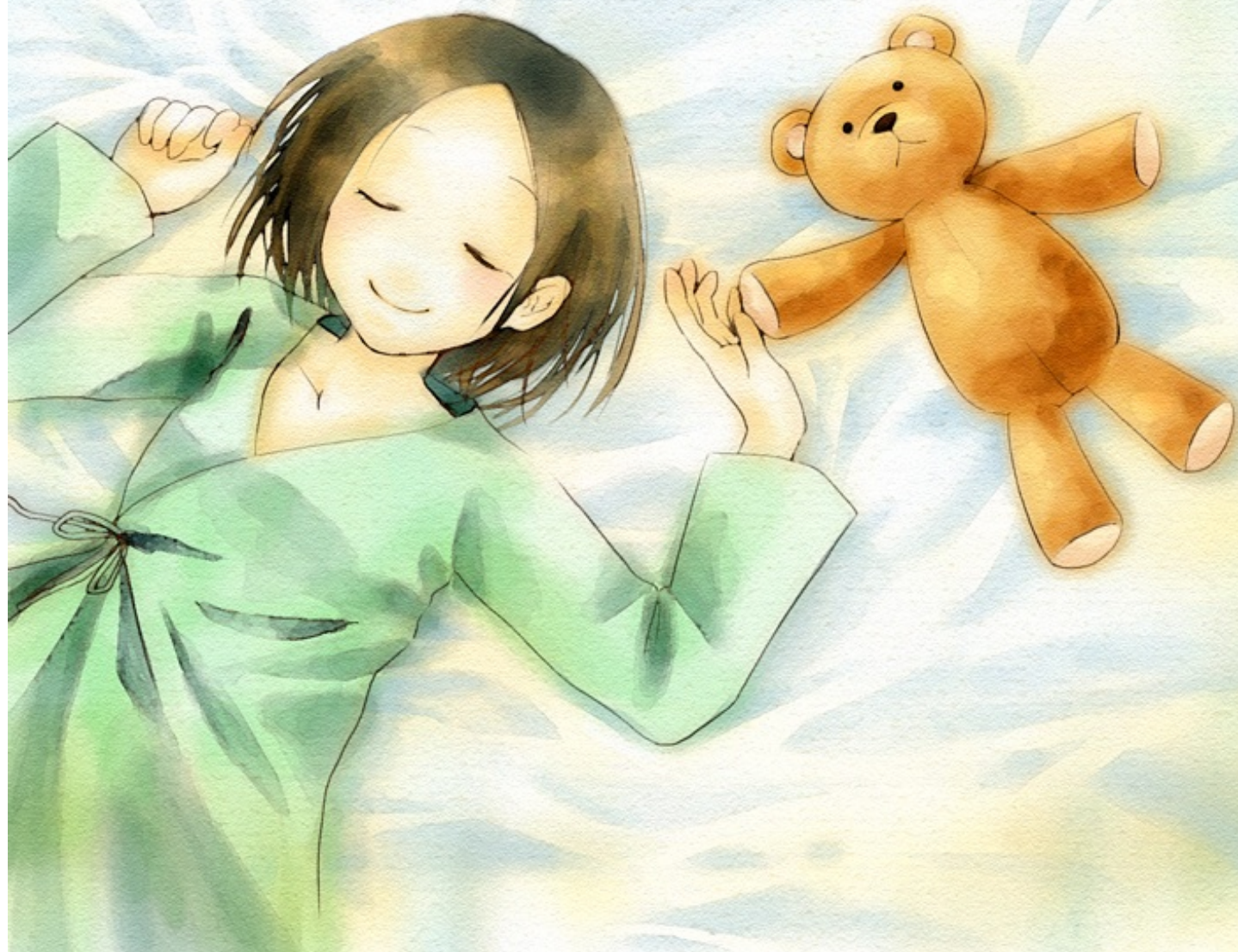


ぼくとご主人様

吉野茉莉



#1 「そら」

ぼくは正直、この現象に対して、その張本人にどう言おうか悩んでいた。

「ねえ、何しているのさ？」

ぼくは、ぼくよりも小さく倒れて仰向けになっている女の子を見た。細い細い、糸のような髪の毛、気が付けばベッドに融けてしまいそうな白い肌に体を覆うだけの役目しかない白い服。

「空を見ているんだよ」

彼女はぼくを見返さず、楽しそうに答えた。

「空の、何を？」

「空の、青さかな？」

「ここから？」

「そう、ここから」

彼女は簡潔に、さもそれが当然であるかのように返した。

ぼくにはよく分からない。

「どう？」

ぼくは、彼女に「彼女の空」がどのようになっているのか、問いかけた。

「やっぱり、青いね」

「ねえ、質問なんだけど」

「受付時間は終了しました」

けらけらと笑って、彼女は足をバタつかせた。

「ここから、どうやって空を見ているのさ？」

ぼくは、彼女の視線と同じ方向を見た。

しかし、確かめる必要もなく、この一面純白の部屋には天井があり、外を覗ける窓もない。四角い四角い、ただの部屋なのだ。

「細かいね、カトークンは」

「細かいよ、ご主人様よりは」

「ぬいぐるみなのに？」

「ぬいぐるみだからさ」

相変わらず彼女は空を見上げている。

ぼくらの空はいつも有限で白い。

「カトークンも見ようよ」

「うん？」

ぼくが曖昧な返事をしている隙に、彼女はぼくのこげ茶の腕を掴んでぼくを胸元へ置いた。

「ね、青いでしょ？」

彼女は、真実、それが正しいことであるかのように、ぼくに同意を求める。

「……そうかもね」

ぼくは、白い空を心の中で青く塗りたくった。

#2 「とけい」

チクタクと、白い壁にぶらさがる丸い時計が歌う。

ぼくは時計の音が嫌いだ。

何か、追い立てられるような気がしてたまらないから。

この世界には、音のしない「でじたる」というものが存在しているらしい。

きっと、この音が嫌いな人達が頑張っって作ったんだろう。

それが見てみたくてご主人様に一度お願いしてみたけれど、ご主人様は難しい顔をして、
「それはできないの」

と言った。

できない、といわれればどうしようもない。

「うん、わかった」

ご主人様の言葉には従わなくてはいけないのだ。

ぼくにとって彼女は絶対であり、彼女がいてこそこのぼくなのだ。

もちろん、それに不満なんてない。

「素直だね」

「ご主人様よりはね」

「まるで私が素直じゃないみたい」

「まるでご主人様が素直みたい」

ぼくが返した。

「減点1だよ」

彼女は、笑いながら言った。

「あと、何点あるの？」

「何点でも」

彼女は、枕元に置いてあった時計のネジを回す。

こうやって、彼女はいつも自分の好きな時間に変えてしまうのだ。

「減点の意味ないよ」

彼女がネジを巻き終える。

今日の希望は七時半だった。

七時半になった時計は、静かにまた時間を刻み始めた。

「嫌なの？」

「……違うよ」

「それならオッケーだね」

何がオッケーなのか、問題は一つとして解決していないけれど、ご主人様が上機嫌のようなので、ぼくもこれ以上何か言うのを止めた。

そして、今日も新しい時計が増えた。

#3 「てがみ」

今日もご主人様は上機嫌だ。

「ねえ、キレイでしょ？」

彼女は手に持った紙をぼくに見せる。

本当に、嬉しそうだ。

「また手紙が届いたの」

ぼくに見せた紙を、また自分の手元に戻す。

ぼくは会ったことはないけれど、彼女には世界中を旅する知り合いがいて、定期的に手紙と写真を送ってくれるのだ。

それを、彼女はとても楽しみにしている。

それが今日届いたのだ。

「こんなに大きな橋があるんだ」

彼女はその写真を見ている。

「ねえ、カトークン、人がこんなに小さいよ」

彼女は指差しながら驚いている。。

彼女が楽しそうなら、ぼくも嬉しい。

それだけだ。

それだけでしかない。

「いいなあ」

ベッドの上で足をバタバタさせて、彼女は言った。

真っ白なベッド。

真っ白な服。

真っ白な肌。

これが、ご主人様の全て。

そして、そのご主人様がぼくの全て。

「ねえ、カトークンもそう思うよね？」

彼女が、ぼくに写真を見せる。

でも、ぼくは知っている。

「キレイでしょ？」

「うん」

彼女の持つ写真には、何も写っていないことを。

「うん、キレイ」

ぼくは嘔吐きだ。

でも、きっと、ぼくはぬいぐるみだから、ご主人様が見えるものが見えないだけなのだ。

#4 「おきゃくさま」

「いよっ」

部屋に入ってくる人がいた。

全身が白い服で、右目に眼帯をしている。

ピチピチの服で、体型がはっきりわかるほどだけど、ぼくは外の世界の服はどんなものなのか知らないで、彼女の服装が「普通」というのかはわからない。

右腕にも包帯が巻きつけられている。

「おはようございます、タマさん」

ご主人様は、その人に丁寧に挨拶をした。

これも毎朝の光景だ。

少なくとも、ぼくはこの部屋に来たときから。

「残さず食べよ」

「はい」

食器をご主人様の前に並べる。

その人はここに食べ物を持ってきてくれる。

ぼくはぬいぐるみだから、食べ物は必要がない。

前にご主人様が蜂蜜を口に押し込んで、ベトベトになってしまったことがある。

そのときは、この人にその場で洗われた。

ゴシゴシと、なみなみの板でこすられて、とても痛かった。

「あと、着替え持ってきたから、食べ終わったらな」

ぼん、と彼女は服を投げた。

着替えといっても、普段着ている白い服と変わらない。

少しは色んな服を持ってきたら良いのに、とぼくはいつも思う。

「着替え、手伝うからな」

こう見えても、彼女のご主人様に優しい。

「お前はどっかにいってろ」

そしてぼくに冷たい。

「カトークンをいじめないで」

ご主人様がかばってくれた。

「はいはい」

タマさんは、適当に返事をする。

タマさんと目が合った。

「お前も食べるのか？」

「いらないよ」

「いるっていても上げないけどな」

ぼくはタマさんが苦手だ。

#5 「ゆめ」

すやすやと寝息が聞こえる。
部屋は暗い。
照明は消えている。
時計の針がチッチッチ。
時計は働き者だ。
ぼくはご主人様の横にいる。
ご主人様の手が、ぼくの肩に置かれている。
ご主人様は眠っている。
ぼくは眠らない。
ぼくはぬいぐるみだから。
ときどき、小さな笑い声を上げる。
ご主人様は夢を見ているようだ。
幸せそうな顔。
きっと楽しい夢なんだろう。
その夢に、ぼくはいるのかな。
ぼくは少しだけ気になった。
彼女がどんな夢を見ているのか、ぼくはわからない。
ぼくは、夢がどんなものなののかも、良く知らない。
ぼくは夢を見ないから。
ぼくは眠らないから。
ご主人様はすやすや眠る。
ぼくは夢を見ない。
ぼくはぬいぐるみだから。
でも、心配はない。
暗くても怖くない。
ぼくは、ずっとご主人様を見ていられるから。
永遠に、永遠に。
ご主人様。
ぼくはずっといるよ。
いつまでも、いつまでも。

#6 「ごはん」

食事が終わる。

ご主人様は、それから、ベッドの横に置いてあったガラス瓶を持ち上げた。

「あげないよ」

ぼくがそれを見ていたのに気が付いたみたいだ。

コルクのふたを開ける前に、ご主人様は舌を出した。

「いいよ、食べられないから」

ぼくはかぶりを振った。

「カトークンはぬいぐるみだもんね」

彼女が笑う。

「それに、あまり美味しそうじゃない」

「そうかな」

彼女は、ガラス瓶を真下から覗き込む。

「そうかなー、もったいないなー」

あからさまに意地悪そうな顔で、彼女はぼくに微笑む。

「本当に、美味しいの？」

ぼくが聞く。

「どうだろう？」

彼女は首をかしげた。

「どうだろうって……」

ぼくの疑問も無視して、彼女はふたを開ける。

中には、色とりどりの小さな塊がぎっしりと入っている。

それは、「こんぺいとう」というらしい。

その中から、いつもお気に入りのいくつかを取り出して彼女は口に入れる。

そして彼女は決まって小さくセキをして、水を飲む。

「食べてみる？」

涙目になりながら、彼女は笑って瓶を差し出す。

こんぺいとうが、じゃらっと音を立てた。

ぼくはもう一度、ご主人様の顔を見る。

「……いらない」

彼女は、少しだけ残念そうな顔をした。

#7 「さんぽ」

ご主人様は今日は不機嫌だ。

ふてくされて、ベッドでごろごろしている。

今日は、朝からご主人様は散歩に出かけていた。

散歩にぼくは連れて行ってもらえない。

ご主人様は連れて行こうとしたけれど、タマさんが駄目だと言ったのだ。

「散歩って楽しい？」

「全然」

ご主人様も、あまり行きたくないと思っているようだ。

嫌いなら行かなければいいのに、と思うけど、それは「キソク」というものらしい。ぬいぐるみにはキソクはないので楽だ。

「そうなんだ」

散歩で何をしているのか、ご主人様は一度も言ったことがない。

「カトークンが一緒だったらいいのに」

ご主人様と一緒になら、ぼくはどこへでも行ける。

「またお願いしてみようか」

「でも、駄目って言われませんか」

ぼくはタマさんにあまり好かれていない。

「どうだろうね」

ご主人様は曖昧な返事をした。

「カトークンは行ってみたい？」

「ご主人様が連れて行ってくれるなら」

ぼくはご主人様がいればそれでいい。

「カトークンは、どこに行ってみたい？」

「ご主人様が連れて行ってくれるなら、どこでも」

「それじゃあ、いつかピクニックに行こうよ」

ご主人様はいつも部屋でピクニックの歌を歌う。

「バスケット持って？」

バスケットを持ってどこまでも行く女の子の歌。

「そう、バスケット持って」

タマさんが教えてくれた歌だ。

彼女にしては、可愛らしい歌だと思った。

「天気の良い日に？」

「そう、天気の良い日には、バスケット持って」

そして、ぼくらはピクニックの歌を一緒に歌った。

#8 「スプーン」

ご主人様には、お気に入りのスプーンがある。

そのスプーンはぼくが来る前から彼女が使っているスプーンだ。

食事のときはいつもそれを使う。

それ以外でも、散歩に行くときも彼女はスプーンを持って出かける。

銀色のスプーンは、こんぺいとうが三つ乗る広さしかない。

「んー、んんー」

ご主人様はスプーンをゆらゆらさせながら、鼻歌を歌っている。

食事はとっくの前に終わっている。

鼻歌が急に止んだ。

けほん、とご主人様はセキをした。

かちゃん、とスプーンを落とす。

スプーンは、ベッドでぼん、と跳ねて、床を滑った。

ご主人様は、落ちたスプーンを見ている。

「どうしたの？」

ご主人様は、ベッドから降りようとしなない。

「ううん、大丈夫」

ご主人様は、ぼくを見ないで返事をした。

そういっても、彼女はしばらくの間スプーンを拾おうとしなかった。

ぼくは、ぬいぐるみだから取りに行けない。

「ごめんね」

ご主人様が言った。

今もご主人様はぼくを見ていない。

「うん？」

「なんでもないよ」

彼女は笑っていた。

「変なの」

「変だね」

「さよなら」

「うん？」

「なんでもないよ」

彼女は笑っていた。

#9 「せき」

ご主人様は空を見ている。

ご主人様には、青空が見えている。

「カトークン」

ご主人様がぼくに触れた。

「なに？ ご主人様」

「一緒にお散歩してみたいね」

「そうだね」

ぼくはこの部屋から出たことがない。

だから、ほんの少し不安があるけれど、ご主人様がいれば外も大丈夫だろう。

「カトークン」

ご主人様がぼくを持ち上げる。

「なに？ ご主人様」

ご主人様と目が合う。

「明日も一緒に遊ぼうね」

「もちろん」

明日は何をしよう。

どんなことを話して、何をして遊ぼう。

「カトークン」

ご主人様がぼくを抱きしめる。

「なに？ ご主人様」

ご主人様は温かい。

心臓の音が聞こえた。

「一緒にいてね」

「うん」

ぼくはすぐに応えた。

「ありがとう」

「どういたしまして」

ご主人様は、涙目だった。

それから、ごくん、とご主人様はこんぺいとうを飲み込んだ。

せきは少し長かった。

#10 「ねむり」

「チキショウ！」

タマさんが怒っている。

この日、朝からご主人様は部屋の外に散歩に出かけていた。

「だから言っただろう！」

タマさんが叫んでいる。

ご主人様はいつもよりも長い時間、散歩に出ている。

「何でだよ！」

タマさんが俯いている。

ご主人様は一人じゃなくて、タマさんと一緒に戻ってきた。

「何で！ 何で！」

タマさんが泣いている。

ご主人様は、眠ったままだった。

「何で！ 今お前なんだ！」

タマさんの横には知らない人が、何も言わないで立っている。

こっちの人は、タマさんと違って、だぼだぼの白い服だ。

ぼくは眠ったご主人様の上で、彼女の顔を見ている。

「仕方がない」

初めてこもった声で、白い人は言った。

「仕方がない？」

「最初からわかっていたことだ」

ぶつぶつと、小さな声で白い人は話す。

「ふざけるな！ だったら、だったら、何のために！」

タマさんが、白い人の胸元を掴んだ。

「私達の目的は、現象の観測と……」

それから先は聞こえなかった。

タマさんは何も言わなかった。

「搬送を開始する」

白い人はそれだけを言って部屋から出て行ってしまった。

タマさんは返事をしなかった。

そして、ご主人様は眠ったまま。

#11 「ひとり」

ご主人様はもういない。

ご主人様は、眠ったままタマさんに連れられていった。

眠ったまま散歩だろうか。

だから、僕は一人でこの部屋にいる。

タマさんが部屋に来た。

タマさんは眼帯をしていなかった。

どんな目をしているのだろう、と僕はちらりと見たけれど、普通目だった。

怪我は治ったんだ。

タマさんは、テキパキと片付けをする。

どうしてだろう。

色んな時間で止まったままの時計。

真っ白な写真。

こんぺいとうの入ったガラス瓶。

お気に入りのスプーン。

最後は、このぼくだ。

「痛いよ」

ぼくは不平を漏らしたけれど、タマさんは構わず僕を抱えた。

「こんなもの」

彼女はぼくを睨みつけて、強く掴む。

彼女の頬は、真っ赤に腫れていた。

「お前は、悲しくないのか？」

「どうして？」

ぼくはどうして、悲しいと思うの？

「ま、お前に言っても意味ないな」

ぽい、と彼女はぼくをカゴに放り投げた。

ご主人様と一緒に過ごした色んなものと、ぼくは一緒にされる。

止まってしまった時計はうるさくない。

写真を見たけれど、やっぱり白いままだった。

これからどこへ向かうのだろう。

ご主人様のところかな。

#12 「ごしゅじんさま」

真っ暗な部屋の中。
ぼくは、初めて夢を見た。
ぬいぐるみなのに。
夢の中で、ぼくはご主人様とピクニックに出かけていた。
天気の良い日に、バスケットを持って。
いつもの歌を歌いながら、歩いていた。
ぼくはご主人様の横で、手を繋いで。
楽しそうに歌いながら。
どこまでも、ぼくらは歩いていた。
途中、ぼくらは大きな木の下に座った。
一緒に青い空を見ながら、
一緒に時計を回して、
一緒に写真を撮って、
一緒にお気に入りのスプーンで、
一緒にこんぺいとうを食べた。
ぼくらは約束をした。
ずっと、ずっと、一緒にいる、と。
ご主人様は笑っていた。
ぼくも笑っていた。
ずっと、ぼくらは笑っていた。

そしてぼくは夢から醒めた。
ぬいぐるみなのに。
ぼくの目は濡れていた。
ぬいぐるみなのに。

目が覚めて、周りを見渡す。
ぼくは一人きりだった。
ご主人様はいない。

ご主人様
ほくと

吉野茉莉



ご主人様
ぼくと

吉野茉莉



ご主人様
ぼくと

吉野茉莉



